
紹 介

メーリングの「ヴェールト論」*

高 木 文 夫

フランツ・メーリング Franz Mehring (1846-1919) は19世紀後半から20世紀初めにかけて活躍したドイツ社会民主党 (SPD) の代表的な理論指導者の一人であり、さらに第二次世界大戦後しばらくまで、マルクス主義に拠る歴史家および文学評論家として広く知られていたが、21世紀の今にいたってはどちらかといえば忘れ去られようとしている。本稿ではメーリングの著作の中で、やはり広く名前が知られているとは言えない19世紀の革命詩人ヴェールト Georg Weerth (1822-1856) について言及している短い文章を紹介する。

メーリングはドイツ東部ポンメルンのシュラーヴェ (現在はポーランド領) の軍人の家庭に生まれ、ライプチヒとベルリンで言語学などを勉強した後、ジャーナリストとして活動しているうちに労働運動にふれ、ビスマルクによる社会主義者取締法への反対の論陣をはり、マルクス主義を研究、1891年社会民主党に入党し、社民党機関紙『ノイエ・ツァイト Die Neue Zeit』や『ライプチヒ人民新聞 Leipzigischer Volkszeitung』を編集した。20世紀初頭には『ライプチヒ人民新聞』編集長として、軍国主義や修正主義との闘争を展開し、大衆ストライキを支持した。第一次世界大戦期には「戦時公債法案」を巡って社民党内に対立が起こり、党内の多数派に抗してメーリングらは法案に終始反対したために、彼自身も保護拘禁された。ドイツの敗北が決定的にな

* 「ヴェールト論」とカッコ書きしてあるのは、本文を見れば分かるように、メーリング自身は独立したヴェールト論を書いているわけではなく、本稿で扱うのは比較的まとまったやや分量もあるヴェールトへの言及であることによる。

り、キール軍港での兵士反乱をきっかけにドイツ十一月革命が起きると、社民党を脱党し、ローザ・ルクセンブルク Rosa Luxemburg (1871-1919) らと「スバルタクス団」(後のドイツ共産党 KPD) 指導部の一員となった。1919年ルクセンブルクとカール・リープクネヒト Karl Liebknecht (1871-1919) が社民党政権により虐殺されたことを知り、直後失意のうちにベルリン郊外で没する。

メーリングの代表的な著作としては、『ドイツ社会民主主義史 *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie*』(1897/98年), 『レッシング伝説 *Die Lessing-Legende*』(1892年2月～6月『ノイエ・ツァイト』連載後, 同年単行本として出版), 『ドイツ史 *Deutsche Geschichte vom Ausgange des Mittelalters*』(1910年), 『マルクス伝 *Karl Marx, Geschichte seines Lebens*』(1918年) などがある⁽¹⁾。これらの著作はすべて日本語に翻訳され, 他にもいくつか翻訳されている。現在では忘れ去られようとしているとしても, かつて多くの翻訳が出たことは戦前から戦後にかけて日本でも一定程度以上に関心を持たれ, 受け入れられてきたことを証言している⁽²⁾。

最初にある程度まとまって見ることができメーリングのヴェールト評は『ドイツ社会民主主義史』に記載されている。同書第1巻で, メーリングは何か所かでヴェールトの名前を挙げているが, 最初は第10章「カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルス *Karl Marx und Friedrich Engels*」で, 短く

(1) 文学評論としては、『レッシング伝説』の他に, 比較的長文のまとまったものとして, 『ドイツの労働者のためのシラー伝 *Schiller. Ein Lebensbild für deutsche Arbeiter*』(1905年, 第2版1909年)や『ハイネ伝 *Heine-Biographie*』(1911年, これは本来10巻本ハイネ全集の序文として書かれたもの)などがあり, いずれも当時のドイツの労働者階級向けにマルクス主義の見地から執筆されている。このようにしてメーリングはドイツの古典文学や社会主義的な傾向を持った文学を労働者に紹介したが, このような労働者階級に向けた執筆活動はメーリングの重要な仕事の一つであり, ドイツの労働運動史や社会主義運動の歴史に重要な位置を占めている。

(2) 例えば, すでに戦前に翻訳が出版されたものとして, 『ドイツ史』(栗原佑訳 改造文庫, 1936年, 1977年復刻版)があり, 『マルクス伝』はすでに1930年には翻訳出版されている(向坂逸郎訳, 白楊社)。『ドイツ社会民主主義史』も2種類の翻訳(『獨逸社会民主黨史』米田幸雄訳, 春秋社, 1931年, 『獨逸社会民主黨史』塚本三吉訳, 1936年, 改造文庫)が出版され, この他の著作にも多く翻訳がある。このことは複数の図書館蔵書及び古書店の検索サイトにより容易に確認できる。

「マルクスはハイネ、フライリヒラート⁽³⁾、ヴェールトの革命的詩作に、かれの影響を深く刻み込んでおり、かれが審美的判断を下すときにはつねに、感覚の細やかさと深さが目立っている」⁽⁴⁾

と述べ、他の二人とともにマルクスからの影響を簡潔かつ明確に指摘している。さらに同書の第12章「ドイツの社会主義 *Der deutsche Sozialismus*」では約2ページを割いてフライリグラートを始めとする「革命詩人」について言及している。ヴェールトについては最初にエンゲルス Friedrich Engels (1820-1895) による、よく知られた「ドイツ・プロレタリアートの最初の、最も重要な詩人」⁽⁵⁾という言葉で肯定し、評価する。基本的にはメーリングのヴェールト評価はエンゲルスを踏まえているが、ここで具体的に取り上げるヴェールトの詩は異なっている。メーリングがまず取り上げるのは、1844年にシュレーゲンで起こった織り工蜂起に関わる詩「彼らはベンチにすわっていた *Sie saßen auf den Bänken*」(1847)である。この織り工蜂起に関しては夥

-
- (3) 詩人 Ferdinand Freiligrath (1810-1876) の名は日本では従来「フライリヒラート」と表記されてきた。従って、多くのドイツ文学史や彼の作品の翻訳等で彼の名が挙がる時には必ず「フライリヒラート」と表記されてきたが、実際の発音は「フライリグラート」のほうが近いので本稿においては、引用文以外ではこちらを使う。フライリグラートはヴェールトの父親の教え子の子供で、ヴェールトと同じデトモルトに生まれ、詩人の長兄の幼友達として育った。商人修業を経て、商業に従事していたが、詩人としての名声が高まり、詩集『信仰告白 *Glaubensbekenntniß*』(1844年)で民主派への方向転換を遂げ、『サ・イラ *Ça ira!*』(1846年)で革命詩人としての地位を確立。1848年革命時にはヴェールトとともにマルクスを編集長とする『新ライン新聞』編集部に加わった。
- (4) Franz Mehring: *Gesammelte Schriften. Band 1. Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. 1. Teil.* Dietz Verlag, Berlin. 1960. S. 195. 邦訳 F. メーリング『ドイツ社会民主主義史』(上) 足利末男・平井俊彦・林功三・野村修訳、ミネルヴァ書房、1968年、154ページ。
- (5) Engels, Friedrich: *Georg Weerth, der erste und bedeutendste Dichter des deutschen Proletariats.* in: *Der Sozialdemokrat* 7. Juni. 1883. Zürich. エンゲルスはこの文章で青年時代の同志ヴェールトを思い起こし、彼の略歴の紹介とともに、マルクス Karl Marx (1818-1883) の遺品に見いだしたという抒情詩「遍歴職人の歌 *Handwerksburschenlied*」(この詩は「桜桃の咲くころ *Um die Kirschenblüte*」のことである)をドイツの労働者階級が読むべき詩として紹介している。この労働者階級が読むべき文学作品を具体的に推奨するところはメーリングはエンゲルスと同じである。エンゲルスの取り上げた「遍歴職人の歌」やその他の関連する事情については、拙稿「ヴェールト『遍歴職人の歌』考」(香川大学経済学会編『香川大学経済論叢』第82巻第4号、2010年、303~319ページ)を参照されたい。

しい文学作品が書かれているが⁽⁶⁾、ヴェールトの詩は多くのそれとは違い、事件を直接扱うのではなく、当時彼が居住していたイングランドの労働者たちの目を通して、労働者階級の連帯という点から取り上げている⁽⁷⁾。そして、メーリングは同じ織り工蜂起を対象とするフライリグラートの詩と比べ、ヴェールトの詩が「引けを取らない」と評価した上で、「かれは力づよいタッチでチャーティストの力づよいすがたを、ヨークやランカシャーの激しく怒った人々を、そしてこの人々がシュレーゲン織工一揆を聞いて、痛みのこもる歓呼の声をあげるさまを、スケッチしている」⁽⁸⁾と共感を込めて評価している。メーリングにとって重要なことはヴェールトが、工業は人類を解放するが、奴隷にもすると認識していることである。それでメーリングは続けてヴェールトの詩「工業 *Die Industire*」(1845)を取り上げる。彼が引用しているのはこの詩の最後の3連24行であり、詩の結論部分である。貧民は工業化で前代未聞の苦役に駆り立てられているが、貧民の流す涙は「偉大なたたかいに合流し」、貧民の勝利を確定する。そして、

剣と鎖の鍛えかたをまなんだ者は／鎖から剣を作って身を救うのだ／[中略]／
最後の鎖が砕けおち／最後の腕がふりあげられるとき、／工業と言う名の女神は
変貌し／近づく人々すべてを幸福にする⁽⁹⁾

と引用を続け、ヴェールトが民衆が虐げられるだけでなく、反抗し、やがては勝利を収めることを強調していることを指摘する。そして、メーリングは「社会主義詩人」

(6) Vgl. Wehner, W. (Hrsg.): *Heinrich Heine. "Die schlesischen Weber" und andere Texte zum Weberelend*. München. 1980., dito: *Weberaufstände und Weberelend in der deutschen Lyrik des 19. Jahrhunderts*. München. 1981. Kroneberg, L. /R. Schloesser (Hrsg.): *Weber-Revolute 1844. Der schlesische Weberaufstand im Spiegel der zeitgenössischen Publizistik und Literatur*. Köln. 1979.

(7) 「彼らはベンチにすわっていた」を巡る状況については、拙稿「ヴェールトの『彼らはベンチにすわっていた』について」(日本独文学会中国四国支部編「ドイツ文学論集」第23号, 1990年, 31~38ページ)を参照されたい。

(8) メーリング前掲書邦訳214ページ。

(9) メーリング前掲書邦訳214ページ。および *Deutsches Bürgerbuch für 1844*. Hrsg. v. H. Püttmann. Darmstadt. 1845. S. 346 (Nachdruck. c. w. leske. Köln. 2. Aufl. 1975). 詩の日本語訳はメーリング前掲書邦訳を使用。

として優れているのはハイネ、フライリグラートそしてヴェールトであり、他の者は彼らには及ばないことを主張する。ヴェールトがしばしばハイネの形式を用いたことの指摘はエンゲルスの見解を踏襲しているが、ここで注目すべきは、エンゲルスがヴェールトをフライリグラートよりも高く評価しているのに対し、メーリングは必ずしもその通りではない。むしろ上記のシュレーゲン織り工蜂起に関わる作品について述べたところで、ヴェールトの詩がフライリグラートのそれと比べて「ひけをとらない」としているが、その言い方はヴェールトを重視しながらも、フライリグラートのほうを評価しているように思われる。

『ドイツ社会民主主義史』のさらに他の箇所(第二章『新ライン新聞 *Neue Rheinische Zeitung*』)⁽¹⁰⁾ではヴェールトが『新ライン新聞』に連載し、後に本として出版した風刺小説『著名なる騎士シュナップハーンスキーの生涯と行い *Leben und Taten des berühmten Ritters Schnapphahnski*』(1849年)を「天才的な不作法の傑作」⁽¹¹⁾と高く評価している。

メーリングにはヴェールトに関しては『ドイツ社会民主主義史』に記載されている文章以外には数は極端に少ないが、以下に紹介するような短文3編がある。いずれも最初からごく短い文章であったり、比較的長い文章の一部分であったりする(詳細は下記記注1, 4, 5)。従って、本格的なヴェールト論と言うことは出来ないが、ヴェールトの受容史を考える上で参考となる。何故ならヴェールトの文学活動は彼の短い生涯の中でも、さらに1840年頃から『新ライン新聞』終刊の1849年までの短期間であったし、メーリングの文章にもあるように、ヴェールトは他の多くの詩人と異なって、自分が関係する新聞や雑誌に書き散らし、生前にまとまって出版されたのは『著名なる騎士シュナップハーンスキーの生涯と行い』のみで、作品集もなかった彼の作品はアンソロジーなどに編まれることがなければ、忘却されるだけだったからである。ちなみにヴェールトの伝記が初めて親族によって書かれたのはメーリングの文章とほぼ同時期であり、本格的な研究文献が著されたのはこの後1929年のF. P. シラ

(10) ヴェールトやフライリグラート、そしてドロンケ Ernst Dronke (1822-1891) は『新ライン新聞』文芸欄を担当し、ヴェールトが責任者を務めた。

(11) メーリング前掲書邦訳 382 ページ。

一に拠ってである⁽¹⁵⁾。さらにヴェールトの作品が単独に出版されたり、本格的に作品集、選集、さらに全集がまとめられるのはようやく第二次世界大戦後のことである⁽¹⁶⁾。このようなヴェールトを巡る事情を鑑みると、メーリングの文章はドイツの労働運動に関わる各種の機関紙誌に掲載されて、ヴェールトを読むべきプロレタリアートに提供されたことは詩人として薄幸な運命を辿っていたヴェールトの受容史を考える上で注目してもよい。ただし、文章の内容や役割は上記のエンゲルスの文章には様々な点で遠く及ばないことも明記しておかなければならない。メーリングの文章の意味はむしろエンゲルスの文章以後再び忘れられ始めていたヴェールトの名を再び持ち出し、エンゲルスとはニュアンスの違いがあるものの、プロレタリアートが読むべき詩の詩人であることを強調したことにある。しかし、この後ヴェールトの名は再び忘却される道を辿り、上記のようにようやく第二次世界大戦後、ドイツではまずソ連占領地区、後にドイツ民主共和国で復活を始めることになり、ドイツ連邦共和国では、社会情勢の変化に伴い、さらに遅れて1970年代になりようやく注目されることになる⁽¹⁷⁾。

- (12) 但し、『詩集 *Gedichte*』や『イギリス・スケッチ *Skizzen aus dem sozialen und politischen Leben der Briten*』のようにヴェールト自身によって出版を意識して、草稿として編纂されたものはある。因みに前者は後に違った形でレクラム文庫に収められ、後者はカイザーによる初の全集にまとめられて収録された。Vgl. *Georg Weerth. Gedichte*. Hrsg. v. Winfried Hartkopf unter Mitarbeit von Bernd Füllner u. Ulrich Bossier. 及び *Georg Weerth. Sämtliche Werke*. Hrsg. v. Bruno Kaiser. 1956/57 Berlin. Bd. 3.
- (13) *Stimme der Freiheit*. Einzelheft (1899), Buchausgabe (1900) など労働者階級を読者対象としたアンソロジーにハイネやフライリグラート、ヘルヴェーク *Georg Herwegh* (1817-1875) などとともにヴェールトも作品が収録されている。
- (14) Marie Weerth : *Georg-Weerth-Biographie* (handschriftl. um 1910). 及び Karl Weerth : *Georg Weerth. Der Dichter des Proletariats ; ein Lebensbild*. Leipzig. Verlag Hirschfeld. 1930.
- (15) Schiller, F. P. : *Georg Weerth. Skizze zur Geschichte der deutschen sozialistischen Dichtung der 1. Hälfte des 19. Jahrhunderts*. Übersetzt v. P. Baron, überarb. v. Karl Weerth. (Original : Moskau, Leningrad 1929/32)
- (16) *Georg Weerth. Ausgewählte Werke*. Hrsg. v. Bruno Kaiser. Berlin. Volk u. Welt. 1948. *Georg Weerth. Humoristische Skizzen aus dem deutschen Handelsleben*. Hrsg. von Bruno Kaiser. Mit Holzstichen von Werner Klemke. Berlin. Volk u. Welt. 1949. *Georg Weerth. Das Blumenfest der englischen Arbeiter und andere Skizzen*. Mit e. Vorw. v. Kurt Kanzog. Leipzig. Reclams Universal-Bibliothek. Nr 7954 [1954] などが挙げられよう。
- (17) 上掲カイザー版全集及び *Georg Weerth. Vergessene Texte*. Hrsg. von Jürgen-W. Goette. Informationspresse Leske. Frankfurt/Main. 1976. 他に研究書として Vaßen, Florian : *Georg Weerth. Ein politischer Dichter des Vormärz und der Revolution von 1848/49*. Stuttgart. Verlag Metzler. 1971. が出版されている。

さらに「ベルリンの壁崩壊」から「ドイツ統一」の後1990年代以降もヴェールトについての研究論文や作品集が断続的に刊行されて現在に至っている⁽¹⁸⁾。

訳出の底本としては『メーリング全集 *Franz Mehring Gesammelte Schriften.*』Bd. 10. Dietz Verlag, Berlin. 1977. 所収の各編に拠り、必要に応じて初出紙誌を参照した。また、メーリング、彼に関係する新聞雑誌等については、他に岡崎次郎編集代表『現代マルクス＝レーニン主義事典』下巻（1981年、社会思想社）、Barck, S. u. a. (Hrsg.): *Lexikon sozialistischer Literatur. Ihre Geschichte in Deutschland bis 1945.* Stuttgart/Weimar. J. B. Metzler. 1994、石塚・内田・柴田・的場・村上編『新マルクス学事典』（2000年、弘文堂）及び西尾孝明「ドイツ社会民主党の機関紙活動（Ⅰ）、（Ⅱ）」（『明治大学 政経論叢』第34巻第6号1966年45～66ページ、同誌第35巻第2号1966年37～69ページ）などを参照した。

(18) 1990年代以降は東西対立の終焉に伴って、ヴェールトに対する見方にも変化があり、華やかさはないが、以前にまして彼を巡る様々な催事が1992年の「国際コロキウム」（下記訳注*3のドイツ語文献参照）などを代表として活発化している。これに貢献しているのは詩人の生地デトモルトの「グラッベ協会 *Grabbe-Gesellschaft e. V.*」（1937年～1945年、再建1948年～、機関誌『グラッベ年報 *Grabbe-Jahrbuch*』1982年～）である。この協会はヴェールトだけでなく、同郷のグラッベ *Christian Dietrich Grabbe* (1801-1836) やフライリグラートらこの地方出身の詩人たちを併せて顕彰している。さらにグラッベ協会に関わりの深い研究会「三月前期研究フォーラム *Forum-Vormärz-Forschung (FVF)*」もグラッベ協会等と共催でヴェールトらに関する国際コロキウム等を活発に行い、出版物を刊行している。

1) プロレタリアートの詩人 (1893年9月)^{*1}

通常フェルディナント・フライリグラートが一意義と時代に応じてドイツ・プロレタリアート最初の詩人と見なされる。よりもよって他ならぬフリードリヒ・エンゲルスがフライリグラートのこの位置を、フライリグラートのかなり近い同郷人であるゲオルク・ヴェールトのために争っている。今日のようにヴェールトが忘れられたままであることがないことを望みたいし、かつてはこの限られた空間で彼の思い出が少しだけ新たにされたら良い。

フライリグラートと同じくゲオルク・ヴェールトもデトモルトに生まれ、フライリグラートと同じく商業に従事した。ドイツ系商社の社員としてヴェールトは1843年ブラッドフォードへ行き、エンゲルスと知り合って親交を結んだ。その後マルクスとエンゲルスが1845年にブリュッセルに住むと、ヴェールトは自社の大陸でのエージェントを引き受け、同様にブリュッセルに自分の本拠地を置けるようにした。1848年の三月革命後は三人全員がケルンで『新ライン新聞』編集部で一緒になった。ヴェールトは文芸欄を引き受けたが、傑出すると同時に愉快的な文芸欄がある新聞は他にはないだろう。ヴェールトの主要な作品は『著名な騎士シュナップハーンスキーの生涯と行い』である。この作品はハイネによる『アッタ・トルロ』でこんな渾名を付けられたリヒノフスキー侯爵の冒険を描いている。文芸欄のシュナップハーンスキーは1849年にハンブルクのホフマン・ウント・カンペから出版され、今日でも極めて愉快地読むことができる。しかし、周知のようにリヒノフスキーは1848年9月フランクフルトの市街戦で殺害されたので、ドイツ帝国執政は亡くなったリヒノフスキーの名誉を毀損した廉でヴェールトを告訴した。とっくの昔にイングランドに移っていたヴェールトは『新ライン新聞』への反動が終わってからかなり後に3ヶ月の禁固刑を受け、服役した。仕事が時々ドイツを訪れることを必要としたからである。

50年代初めヴェールトはブラッドフォードの会社のためにスペインへ、それから西インド諸島と南アメリカの殆どを旅行した。ヨーロッパを短期訪問した後、ヴェールトは愛する西インド諸島へ戻った。そこでルイ・ナポレオンの真の原型である、ハイチの黒人王スールークを眼にしようとの気晴らしをせずにはおれなかった。しかし、彼は検疫当局の問題で、計

【訳注】

*1 原題 *Ein Dichter des Proletariats*. 初出は雑誌『フォルクスビューネ *Die Volksbühne*』2. Jg. 1893/94, Heft 1. S. 8-10. 『フォルクスビューネ』は1890年にベルリンに創設された労働者の演劇鑑賞団体「ベルリン自由民衆劇場 *Freie Volksbühne Berlin*」が発行していた雑誌であり、メーリングは1892年から1895年まで「自由民衆劇場」の委員長及び雑誌の発行人をしていた。この雑誌の目標は労働者大衆が気軽に文化に触れ、教養を深めること、もちろん労働者としての世界観を持つことができるようになることである。ヴェールトは戯曲を書いてはいないが、この文章は、重要なプロレタリアート詩人の一人として、ヴェールトの生涯を紹介することに重点を置いて、かつてこのような詩人がいたことを周知し、彼の作品への手引きを行っていることにささやかな意義が認められる。この文章の後半はやはりエンゲルスの評価をなぞっている。しかし、冒頭の文章はエンゲルスとは違って、当時多くが考えていたように、「プロレタリアートの詩人」の代表はヴェールトではなくフライリグラートであることを明示している。すなわち、エンゲルスは、ヴェールトこそプロレタリアートに読むべき詩人であることを主張したが、メーリングの文言は一般的にはフライリグラートこそ「プロレタリアートの詩人」と考えられていたことをよく分かってくれる。

画を断念せねばならず、旅行中に黄熱病の病原体を身につけてハバナに行った。彼は病床に臥し、脳の炎症がさらに始まって、1856年7月30日ハバナで死亡した。

すでに述べたように、エンゲルスはヴェールトをプロレタリアートの最初にして最も重要な詩人と呼んだ。実際彼の社会主義的、政治的な詩は獨創性、機知、特に官能的な炎でフライリグラートの詩をはるかに凌いでいる。ヴェールトはしばしばハイネの形式を利用したが、全くオリジナルな自立した内容を満たすためだけだった。それに加えて彼が多くの詩人と異なっていたのは、いったん書いてしまった詩は彼にはどうでも良かったことだ。ヴェールトが巨匠であったところ、彼がハイネを凌いでいたところは彼のほうが健康的で、純粹だったからである。彼を凌ぐのはゲーテだけで、それは自然でたくましい感性と肉欲の表現だった。それでもいつかはドイツ最後の俗物の判断、虚偽で小市民的な取り澄まし、これらはどっちみち人目を避けた猥談の口実としてだけ役立つのだが、公然と水中に投げ込まれるのだ。エンゲルスが少なくともドイツの労働者が毎日あるいは自然に自ら営むことがらについて、自然な、不可欠な、そして極めて愉快な事柄について偏見なく語ると同様にロマンス語系諸国民のようにホメロスやプラトンのように、ホラチウスやユウェナリスのように、旧約聖書や『新ライン新聞』のようにそうすることに慣れる時代を見出していることにだけエンゲルスに同意できる。

その他にも一自明のことだが一ヴェールトもあくまで不快感を与えることがない詩文を書いた、「ランカシアの歌」^{*3}のように。[…]

2) [ゲオルク・ヴェールト] (1902年)^{*4}

[…]

*2 ユウェナリス (60頃-140頃) は古代ローマの風刺詩人。

*3 「ランカシアの歌」はヴェールトのイングランド時代の代表的な抒情詩群であり、他の関連する抒情詩とともに『ゲゼルシャフトツシビューゲル *Gesellschaftsspiegel*』と選集『アルバム *Album*』に掲載された。この詩群を巡る事情については拙稿「ヴェールト『ランカシアの歌』考」(日本独文学会西日本支部編「西日本ドイツ文学」第4号、1992年、87~98ページ)及び *Zu den 'Liedern aus Lancashire'* in: Vogt, Michael (Hrsg.): *Georg Weerth (1822-1856). Referate des I. Internationalen Georg-Weerth-Colloquiums* 1992. S. 73-84 を参照されたい。

*4 原題 [Georg Weerth] この文章はメーリングが編集したマルクス、エンゲルス及びラッサール遺稿集 (*Aus dem Nachlaß von Karl Marx, Friedrich Engels und Ferdinand Lassalle*. Hrsg. v. Franz Mehring. Bd. IV., Stuttgart. 1902. S. 15/16) の解説に含まれている。ヴェールトに言及しているのはやや長い文章の末尾の一部に過ぎず、元々このような標題は付いていない。この文章でドロンケの名前が挙がっているのは、この箇所以前ではドロンケのことを述べているからであるが、この箇所に限らず、メーリングのヴェールトについての発言には頻繁にドロンケが対比されるように出てくる。ドロンケは上記のようにヴェールト、フライリグラートと『新ライン新聞』芸文欄に関わっていたが、彼の名を一躍有名にするとともにプロイセンの官憲が目だし、プロイセンからの追放処分をもたらしたのはボルタージュ『ベルリン *Berlin*』(1846) で三月革命前のベルリンの暗黒面を暴いたことに拠る。この文章で「(ドロンケの) 詩は今日では忘れられ」ているとした上でヴェールトの詩がプロレタリアートに「復活している」こと、そして主要な小説である『著名な騎士シュナップハーンスキーの生涯と行い』を評価し、復活を期待している旨の証言は注目に値する。

ドロンケとヴェールトは『新ライン新聞』編集部員でラッサールやマルクスと友情で固く結ばれていた。ドロンケは当時パリに住み、その後ジュネーブ、さらにロンドン、最後はグラスゴーに移住し、そこで長い間亡命の貧窮を關った後商人の職を得た。そのため運動の開始時に貢献した労働運動からは遠ざかることになった。彼の詩は今日では忘れられ、残念なことに三月革命前期のベルリンについて歴史的に価値ある書物も同じである。ヴェールトの最も独創的な詩は關うプロレタリアートに復活しているが、それに比して彼のはしゃぎ、機知あふれる諷刺『著名な騎士シュナップハンスキーの生涯と行い』はいまだ復活を希望している。この作品は彼に帝国執政からリヒノフスキー侯爵中傷の告発を受けたが、ヴェールトは機知一杯に「セルバンテスはドン・キホーテを中傷し、ルーベは騎士物語を中傷し、私は騎士シュナップハンスキーを中傷したと言われている」と書いた。しかし、何の役にも立たず、ヴェールトはケルンで3ヶ月の禁固刑に処せられた。破棄院でもっと都合の良い成果が達成されるだろうかというラッサールの疑念には根拠があることが明らかになった。ヴェールトの弁護人ハーゲンに対する彼の詳細な指導は無駄に書かれてしまった。ヴェールトは実際に服役したが、ラッサールとは決して一緒ではなく、彼とは距離を置いてケルンの拘置所であった。[18] 50年5月2日彼はそこからマルクスに宛てて手紙を書いた。「君の好意溢れる忠告に従わず、投獄されていることを怒らないでくれたまえ。(僕は)後で理由を報告するつもりだ。重要なことは僕があれ以上ロンドンに耐えられなかったことだ。あそこでは突飛な考えが僕を早々と不名誉な墓へと送ってしまっていたらと君に断言するよ——(何て残念!)。それ以外にも偽りの政治逃亡者として世界を歩き回るようになるのは僕にはとても不愉快なことに思われる。君やエンゲルス、ヴィリヒ等々の人々が外国にいるなら、意味があり、理解が得られる。しかし、僕はナンテバカバカシイ。僕は本当にごく僅かな犯罪しか犯していないので政治による傷を自慢することは思いも寄らない。」ヴェールトは [18] 56年にはもうハバナで亡くなった。ドロンケは90年代初めまで生きた。

3) ゲオルク・ヴェールト「皇帝カール」(1908年2月7日)^{*5}

本冊子の他の箇所而言及しているハウプトマンの戯曲はとっくの昔に忘れられたゲオルク・ヴェールトの詩を思い出させ、この詩人の散逸した詩はとっくの昔に集められるべきであったからにはその分だけ余計に印刷して載せたいものだ。その詩というのは以下の通りである。

皇帝カール

皇帝カール氏は敬虔な男で
 多くの人々を死に至らしめた
 キリスト教のために人間を殴り殺した
 それが彼には莫大な榮譽をもたらした

そしてアーヘンで壮麗に座している
かわうそ
 川獺の毛皮で出来た胴着を着て
 そして遠く近くの諸国民は
 強大な君主にひれ伏すのだ

そして世界中から贈り物を貰った
 たくさんの黄金や絹や天蓋を
 オリエントのカリフが持ってきたのは
 時計と象だった。

しかし、皇帝カール、敬虔な英雄は語った、
 黄金や金銭が私の何に役に立つ
 異国の象でどうしようと言うのか——。
 自国にもっとすばらしいものを持っているのに。

そしてみどりなすライン河をさかのほ遡った
 そしてインゲルハイムに葡萄を植えた
 そうだとも百もの国の民を打ち負かした血染めの赤い手で
 葡萄を手入れした——

*5 原題 “Kaiser Karl” von Georg Weerth. 初出は『ノイエ・ツァイト』(26. Jg. 1907/08. Erster Band. S. 684.) この雑誌の創刊は1883年1月で、ビスマルクによる「社会主義鎮圧法」下のことだった。ドイツ社会民主党の先鋭的な理論誌で、1901年に党に所有権が移ってからは、「ドイツ社会主義の週刊誌 Wochenschrift der Deutschen Demokratie」という副題を持つようになった。メーリングは1891年春に同誌に協力するようになり、1908年から党により同誌から閉め出される1913年まで同誌の文芸欄を担当した。この文章はメーリングが同誌上で健筆をふるって板敷きに掲載されたものである。この文章は『ノイエ・ツァイト』の誌面では「コラム」のようにヴェールトの詩を紹介しているだけに過ぎない。しかし、ヴェールトの詩の中でよりによって「皇帝カール」が選ばれたのには何か意味があるのだろうか。この詩は元々『新ライン新聞』第2号1848年6月2日付けの第一面下欄(所謂「文芸欄 Feuilleton (Unter dem Strich)」)に掲載されたもので、すぐ右の欄には『新ライン新聞』で連載が再開されたヴェールトの散文『ドイツ商業生活のユーモラスなスケッチ Humoristische Skizzen aus dem deutschen Handelsleben』(第1部は『ケルン新聞 Kölnische Zeitung』1847年第318号~1848年第33号に断続的に連載)の第2話が載っている。同紙上では「奇妙な皇帝たち/ゲオルク・ヴェールトによる/I. 皇帝カール Die komischen Kaiser / von Georg Weerth / I. Kaiser Karl」の標題が掲げられている。恐らく続編が考えられていたのだろうが、日の目を見ることはなかった。「皇帝カール」とはもちろん「カール大帝(シャルルマーニュ)」のことである。ヴェールトは王侯貴族に対しても多く批判的な作品を著している。この詩にも多くの風刺・皮肉・あてこすりなどが含まれている。一方このメーリングによる紹介が掲載されたのは第一次世界大戦前の帝政時代であり、実際にドイツ皇帝が統治していた。ここにアナロジーは存在していないだろうか。そしてこの文章でもメーリングがヴェールトの重要性を認識していたことが明瞭に見取れる。なお、文中のヴェールトの詩を思い出させたハウプトマン Gerhart Hauptmann (1862-1946) の戯曲は「皇帝カールの人質 Kaiser Karls Geisel」(1908)である。

そうだとも百もの国の民を打ち負かした血染めの赤い手で
葡萄を手入れした——
そしてこれがインゲルハイムに
今日でも血のように赤いワインができる理由だ